

児童画と性格の研究

——美術教育における児童画とパーソナリティの問題点——

大 月 賢 志

緒 言

幼児・児童の創造主義美術教育の原理と色彩分析法について（本学研究紀要14号，1971）で述べたが，ここでは，児童画とパーソナリティの解明について追試，独自の性格診断の標識の設定を試みることにするものであって，児童美術教育の指導の原理，美術教育ないしは芸術教育論についてはあえてふれないことにする。

幸い筆者は児童相談所，保育所などにおいて，幾多の事例と実験的に取りくみ，臨床研究を通して性格診断のさまざまな標識的根拠を解説し，さらに今後の研究上の指針を明示したい。

児童画が，児童の性格との関連において注目されるようになったのは，主として1952.5以降といえよう。その間，美術教育の分野においても，児童の絵の指導は，創造主義美術教育の研究と共に，大きな転換期をむかえた。それは目と手の訓練としての技術教科——技術教科から自己の自由な表現を通じて人間形成を図ろうとする指導への転換である。前者は児童に成人の標準を示し，模倣するようにと教え導くいきかたをするのに対して，後者は児童にその発達段階にそくして，年令と必要に応じて描かせ，児童の経験の拡大深化にともなって児童の標準が高まることをねらういき方であり，いわゆる自由主義，創造主義教育思潮である。

もちろんこうした断定を下してしまうことに対して反対がないわけではない。しかしそれほど現在の児童画指導の問題は，混沌たる様相を呈しているといえるのであるといたい。新しい美術教育を主張するいろいろな団体の考え方の根底には，いずれも，子どもの自由な表現の上に立っての主張であり，それでこそ，それらの主張の現代的な意義を認め得るのではないかと思う。

新しい美術教育の主張が，いろいろと述べられているけれども，日本全国の，現場の教室にまで，喧伝される声の大きさの割には，そうした主張の影響を受けて子どもの自由な表現をのばし育てることを教育の基盤として考えるような美術教育はあんがい具体化されていない。否むしろ，大部分の幼，小，中学校の美術教育は，指導要領に反し，相変らずの技能教育，写生教育を続けているといっていよい。

（1）創造主義美術教育

今日，わが国を含めて世界の自由主義国家のほとんどの国の美術教育は，“美術をととしての教育”をたてまえとして行なわれている。“美術をととしての教育”すなわち，“Education through Art”という思潮は，イギリスの偉大な思想家，故ハーバート＝リードの考え方に影響された点大きい。

リードは命題として，「芸術は教育の基礎でなければならない。」とし，「子どもが生まれつきもっている創造力を美術を通して励ますこと。」を美術教育の基本的態度としている。

一方，ソ連や東独等の社会主義国家においても，「子どもの体験した現実について認識し，それを芸術的手段によって，しっかりとらえさせる。」ためにリアリズム（写真）的方法をとる美術教育が行なわれている。思想的にはリードの考え方とは異なっているこれらの国々といえども「子どもたちを社会主義社会の積極的な成員に育てる」ために行なわれる美術教育

であるから、人間をつくるための美術教育であることでは変わりはない。

したがって今日の美術教育は、子どもを画家にするための技術の教育でもなければ、数人の天分に恵まれた子どものためにあるものでもない。

すべての子どもたちのもっている力を励まし、造形的な手段をとおして、平和的、創造的な人間に育てあげるためのものでなければならない。

絵というものは、このように描くべきなのだ、こう描かなくてはいけないのだというような形で、教えこんでいる大多数の現場の教師たちにとって、子どもの自由な表現活動の中には、「子どもの性格が、プロジェクトされる」といったところでピンとこない。その現場で自由な表現活動と思われているものはなかなかどうして自由なものではない。従って子どもの性格はその描画活動の上にそれほどあらわれてこないのが当然であって、そうした実状を考えれば、性格と自由画との関係など、まるで夢ごとのように考えられるのはあたりまえであろう。

しかしとくに、ここで述べるような分析的な自由表現に対するいろいろな研究成果は、こうした従来の美術教育のやり方の反省の上に立って利用しなくては、意味の薄いものとなってしまふのであろうし、また随分危険なものになりそうである。

(2) 児童画とパーソナリティの研究方法

その代表はアルシュラーとハットウィック両女史の「絵画とパーソナリティ」研究である。本書は彼女たちが150名の幼児について、1年間くわしく研究をつづけ、そのうち20名については、更に1年間継続研究した記録で、すぐれた点で、他の研究者を断然ひきはなしている。それは研究結果よりも、研究方法について、示唆するところが多い。

幼児の絵にはアブストラクトなものと、何か外のものを表現したものがある。アブストラクトといっても、芸術様式としての高度な抽象絵画でないことは、当然であって自分の気持のおもむくままに、何とはなしにクレヨンを動かしたものである。従ってそれは、主観のあらわれである。これに対し、外のものを表現する絵は、いわゆる写実的な絵画であってこれは、外界をあらわしたものである。外界をあらわすといっても、単に外界の模写でなく、それについての主観の加わったものであることは、言うまでもない。しかし、たとえば、リングを赤く描いた場合、それはリングが赤いから赤くかいたのか、その時の子供の気持が赤を欲求していたから赤くかいたのかかわからない。またリングを曲線でかいても、それは曲線をかくような感情状態の表現なのか、単にリングが曲線であるから、そうかいたのか、それは曲線をかくような感情状態の表現なのか、単にリングが曲線であるから、そうかいたのか、区別できない。そこで「絵画とパーソナリティ」は幼児のアブストラクト絵画とパーソナリティとの関係を考えようとしている。表現的絵画とパーソナリティの関係にいきなりとびこまないで、まず抽象絵画とパーソナリティの研究をしようとしているのは、方法論上、慎重な態度である。

第2に幼児の絵画とパーソナリティの研究は、幼児の生活全般の理解の一環として取りあげられている。子供の絵だけを研究せず、子供の生活全体を丹念に研究して、それとの連関をはかっているのである。この点は重要である。というのは、子供の絵だけを見て、独断的に子供の性質を論ずる人が世間には、少なくないからである。子供の絵は、医者が患者の脈をとるようなものである。脈のほかに、熱、舌の状態、排泄物の検査、聴診器による検診、薬物反応など、いろいろな調査により、はじめて病気の診断がなされ治療が施される。子供の絵も、それらの一方面であることは間違いない。しかし絵だけで一義的に診断できるほど、現在の絵画理論や心理学は進んでいないのではなからうか。最近我が国でも美術教育者による絵画分析の研究が盛んになっていますが、まだまだむしろ研究時代なのである。とすれば、幼児の生活で他

の資料ではっきり解っている方面をしらべ、それと子供の絵画がどう関係するかを研究することは、きわめて賢明なのである。

第3は理論的研究と実際研究を総合させることである。この方面の研究は、まったく無理論のものが多い。たとえば、子供が紫の色を好んで使ったら、その子供は、結核患者だというような研究がある。それなら紫がどうして結核と関係するのかという理論は全然なく、ただ統計的にそうなるというだけである。しかしアルシュラーとハトウィックの研究はそういう単なる事実調査だけでなく、そうならねばならない理論を常に考えている。統計は補助手段であり、統計のみで事を考えるのは冒険なのである。絵画理論や心理学の理論をたえず参照してこそ、実り多い研究が期待されるのである。

第4は臨界場面を研究することである。幼児にとっては、幾つかの危機的な場合がある。そういう場面には、情緒の変動がうかがわれやすいから、それと絵画との関係をみてゆけば、比較的に研究がしやすい。たとえば弟妹が生れて、親の愛情が自分から移ってゆく場合、親の排泄に対する訓練がとくべつ厳格すぎた場合、お誕生祝いなどで特に幸福な場合、病気をした場合、近親が死んだ場合、何かを恐れている場合などがそうである。性格を研究するには、臨界場面を研究することが大切である。それを絵画と関係づけたのは、まさにアルシュラーとハトウィックのすぐれた着想なのである。この研究による診断の標識についての主調色の性格について、研究紀要で紹介しているのでここでは割愛する。

(3) 指絵法と治療

1934年、ショウ (Shaw, R. F.) の創案によるフィンガー・ペインティングは、その後、ナポリ (Napoli, P. J.), ブルム及びドラゴジツ (Blum, L. H. and Dragositz, A.), オグラディ (O'grady, R. M.), 我が国でも、小西、宮武辰夫氏 (世界的幼児絵画研究者), 筆者らによって多年研究され、その診断及び治療法としての意義が認められるようになってきた。例えばナポリの研究によると第1段階、すなわち、作業にとりかかる前に、肘をつくのは、自我意識のシンボルを、テーブルにもたれて坐るのは、自信の欠如を、片足を他の足にまきつけて立ったりするものは、内気、恥しがりや、臆病を示す徴候である。第2段階、すなわち、描画中の手の使い方において、爪を使って、ひっかくものは、残忍な性格、人指し指を使うものは、神経質、指をもちあげて掌だけでかくものは、情熱家か背徳者、手の側面を使うものは、職業、社会への不適応者、腕を用いるものは、浪費癖のあるもので、指のみを用い、絵の具を弄ぶものは、手淫の傾向者であるとしている。又、絵の具や水の使用量の多いものは、自信欠如のものに多く、使用量の少ないものは、臆病で創造性の乏しいものに多い。作業動作のおそいものは、抑圧されていることが多く、絵の具が衣服につくことを非常に気にして反抗的になったり、体をこわばらせたり、手のおいをかいたり、絵の具を顔にぬったりするものも、普段きびしい抑圧をうけているものに多い。

又、紙の左の方からかくときは、興味をもって、落ついて描く場合であり、左のはしっこにかくものは、不注意で、気が散り、陰気なものが多い。紙の中央にかくものは、臆病で、自己中心的である。

又、絵の具のぬり方において掌で、こするように、あらゆる方向にぬりたくるものは、2つのグループがあり多くは、緊張がとけて、ニーズやコンフリクトなどが解決される場合と、時には緊張状態によっておこる場合とがある。次に、手もとから周囲におしだすようなぬり方は、心理的には外部への逃避と提携を意味している。逆に周囲から手もとに引き入れるような動作は、内部への自閉を意味する。又、軽い平手打ちは、満足した心理状態を、烈しい平手打ちは、怒り、反抗、拒絶など強烈な情緒をあらわしている。次に、指の第1関節をふるわし

て、湯気のようなストロークができるものは、これによって、衝動的な感情の解消するという治療効果がある。指さきで、絵の具をつまみ上げたり、おさえたりする動作は、罪悪感を意味するなど……

第3段階、すなわち、作業後における言動も診断の材料となる。

指絵法の診断については、なお研究すべき点が少ないが、自由画の場合と同じく、出来上った結果のみによって診断することが危険であることは言うまでもない。ナポリも指摘しているように、全経過を通じての観察に基づく分析が必要である。もう1つ留意すべきことは、指絵法が診断と治療に役立つためには、指絵に際して、出来るだけ一般画法の固執傾向があらわれないようにすることが必要である。一般画法から指絵法への転換をうながす方法として、石井哲夫氏は、(1)ガラスに子どもの好む色をぬって与える方法、(2)汽車や家の絵をかいているうちに、その細部の表現や形に失敗して、指絵法の状況に入っていくようにする。(3)は、(2)の場合で、部分的に失敗した時、そこだけぬりつぶして形をつくり、その形をつかって大きな絵をつくっていく方法とをあげているが、(1)の方法は、なるべくさき各人が個別的な契機で、ウォーミングアップをおこなって、自発的に指絵法の状況に入っていくことが望ましいとしている。

幼児に実際経験されだしたのは、戦後で創造美育の流れをくんでおり、特に3・4才から5・6才まで指絵により治療効果をあげている園が多い。普通幼児には、もちろん夜尿児、家庭の抑圧、父親の欠除、しつけの厳しい家庭、清潔をしいる家庭、冷たい家庭、暴力をふるう家庭、劣等感のある子供など長期間継続することによって治療効果をあげている。泥んこ遊びと結びついて、遊びの中で精神の安定をはかり、無意識的なうちに心の深層部にひそむ病根が自然のそれによって発散し、精神治療がなされているわけである。

(4) 絵による性格診断法の問題点

このような診断法は、精神医学(精神分析学)、精神(大脳)生理学、心理学(臨床心理学)の論理と臨床実験が、その根拠になっているが、今なお研究の途上にあるものが多く、今後の研究にまつ所が大きい。一応、その理論的根拠が認められたとしても、これを、臨床的に実施し、診断づけるには、余程慎重でなければならない。

第1に診断の対象になる絵が、あくまでナイーブに、子どもの内的なニーズなり、情緒なりが、吐露、表出されていることが必要である。既に習得された知識なり、技術なりによって描かれた絵は、資料になり得ないのである。

そのために、被検査者と検査者との間のレポートメイキング(精神的融和構成)、状況適応のためのウォーミングアップが必要となるわけである。従って又、診断にあたって、作品の結果(色、形など)だけによって、機械的に診断を下すことはつつしむべきで、その全過程、特に根本的動機をつかむようつとめるようにしなければならない。

次に、これらの診断法における事例分析には、例外があらわれることがあるから、例えば、「盗癖児は、黒と茶を好んで使う傾向がある」からといって黒と茶色を使うものは、すべて「盗癖児」と断ずることはできない。と同時に、現場の人たちの中には、色とか形とかだけを、きりはなしてぬきだして診断しようとするものがあるが、これは危険であって、前にもしばしば述べたように、いろいろの象徴、条件、さらには、他の検査、調査、観察の結果を総合して診断すべきである。

私たちのとるべき態度は、これらの方法(又は、その結果)を盲信(又は狂信)することでもなく、逆に、頭ごなしに、非科学的な迷信として、罵倒し去ることでもない。進んで、これらの研究に協力し、実証的資料を豊かにすると共に、その理論的根拠を確実強力なものにする

よう努力すべきである。そして、私たちは、子どものパーソナリティの診断に際しては、その兆候、すなわち、フェノタイプ（顕形）でなくて、その動機、原因、すなわちゲノタイプ（原因）を探知することが必要である以上、その意味で、絵による診断は、まさに、そこをねらうものであって、人格の診断法として極めて重要な方法といわざるを得ない。

（５）治療の問題

以上、主として絵による人格の診断法について述べたが、ここでは、治療の問題にふれてみたい。尤も、診断と治療とは切りはなして考えることは出来ない。子どもへの正しい理解、それが正しい診断への、従って、又、治療への道である。今まで述べてきた絵による診断法が、人格の心理的診断法として広く用いられつつあると同じ意味で、絵による心理療法が最近行なわれるように相当効果をあげてきている。

プロジェクト・テクニックは、殆んどすべて、抑圧された情緒反応をひきおこすもので、前に述べた自由に描かれた絵、フィンガー・ペインティングなども、それが、各人の人格過程をあらわすだけでなく、うっせきした情緒を放出し、情緒的解消をもたらす浄化的反応としての治療価値があるのである。

更に、子どもの創造性を美術教育によって啓培し、伸長させて、自主的な人間形成を目ざすと共に、教師や親たちの自己改造を求める創造主義教育も、人々を、抑圧から開放し、主体性の確立された人間にまで育てあげると言う点で広義の治療教育ともいえる。

しかし、現在、臨床心理学、精神衛生の立場から、子どもの絵が、精神治療として用いられた多くの事例はあるが、これを組織的に行なった研究は極めて少ない。最近では、遊戯療法（プレイ・セラピー）の中に、取り入れられた、自由連想画やフィンガー・ペインティングの研究も、系統的に行なわれるようになった。これらの研究では、先にのべたが主として、欲求不満や心理的葛藤による情緒障害、吃音、夜尿児、チック症の治療に関するものが多い。

ここにそれらについて詳述することはできないし、その必要もないので、ここでは私自身の研究、その他、現場における興味ある事例の一端を述べるにとどめたい。

私は、かつて精神薄弱児の中で、特に劣等感の強いもの、種々のコンプレックスのあるもの、情緒障害等性格異状のあるものの診断と治療に、フィンガー・ペインティングを用いて、成功した事例をもっている。その中の一例について述べると、W（I.O.50, 11才, 男児）は、父親に4才で行方不明、母親に育てられたが、母親とのコンプレックス悪く、その行動は極めて、攻撃的で学友と喧嘩が絶えまなく、特に女兒に暴力行為をしていた子供であったが、ペインティングを始めてから数ヶ月後（日に1・2回実施）情緒も次第に安定し、表情も豊かになり、わいせつ、暴力行為は、殆んど治療された。彼は自分が憎悪している学友をペインティングの中で、しばしば殺害したり困らせたりして、ペインティングに夢中になっていた。O（I.O.95, 6才, 女児）は、いつも火を題材としての絵を描いて家が焼けた、父、母、友達、犬などが焼けた、又は殺したなど不安な絵をるヶ月あまり毎日描き続けていたが、ペインティング治療法によって表情も明朗化し、自由で明るい心を取りもどした。火に対する関心を示したのは、死と火葬に対する大きなショックと鋭い感受性のためであって、ペインティング遊びを継続しているうちに、自然治癒された例である。こうした精神的な症状のある子どもにとって、下剂的役割もありミス、ショウも実証している。特に夜尿症は精性的素質の子供に多く、興奮や恐怖を与えないようにし、医学的にも精神的訓練を再重要視するなど述べている。筆者の研究から見てもこのような事例のほかに、萎縮児の治療事例も多数あるが恐怖、不安、反抗など除去することは、創造美術教育においても重要であり、描いたり、なすくったり、消したりしているうちに無意識な不安が除去され、精神治療が果されるわけである。

(附記)

この研究は、絵画による精神治療分析に関する試案であって、とりくんできた研究方法の一部である。次号において幼児画の分析、特徴などを図解、解明予定。

(6) 附 図 説 明

- 図1 犬にかまれ動物恐怖症という不安定な幼児の絵、ペインティング、遊具治療により動物アレルギーが治療された数ヶ月後の絵 (C.A5:5)
- 図2 家庭環境悪く父親に対する反抗心のあらわれた絵 (C.A6:0)
- 図3 極度の盲愛児、治療後空想的な絵となった幼児の絵 (C.A4:8)
- 図4 情緒不安定で安定感欠除、萎縮した幼児で梢消の心理をあらわした幼児の絵 (C.A3:8)
- 図5 淋しく萎縮した感情の幼児の絵 (C.A6:4)
- 図6 図7, 図8, 3枚の絵は、1人の幼児の絵で消極的、孤独、無気力、淋しがりやであった。図6は画紙の中央に細々と萎縮した絵を淋しく描いた。孤独な心を強調している。図7は治療方法として感動的環境をつくるため花火を見にいった後描いたポスターカラーの絵、流動的感情のあふれたよい絵。図8は治療過程の一例で集団の中でも伸々と自由にたくましく描けだした (C.A5:8)

参 考 文 献

- 宮武辰夫：幼児と精薄児：黎明書房 1965
- 大勝恵一郎：美術教育の構造：ダウイッド社 1972
- 桑原 実・林 健造：幼児絵画製作教育法：東京書籍 1968
- 岡田 清：子供の絵：創元社 1970
- 幼児画創造教育の意義と色彩分析：県立短大紀要 15号 1971

图 1 (恐怖症)



图 2 (反抗)



图 3 (盲愛兒—空想)



图 4 (情緒不安·萎縮)



图 5 (萎 縮)

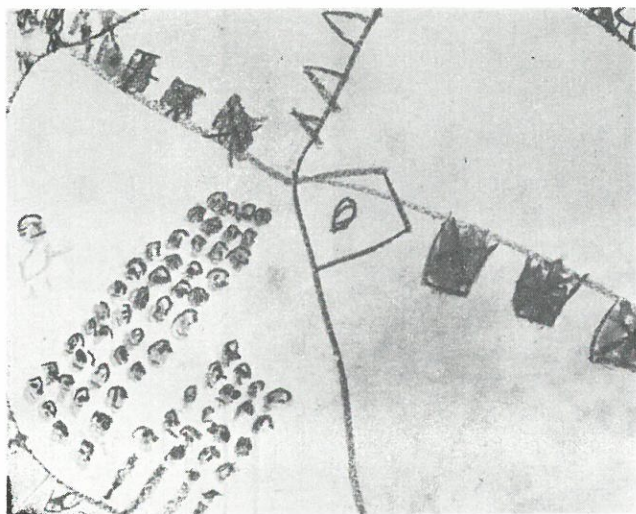


図 6 (上) 図 7 (下)

消極・孤独・萎縮児の治癒過程

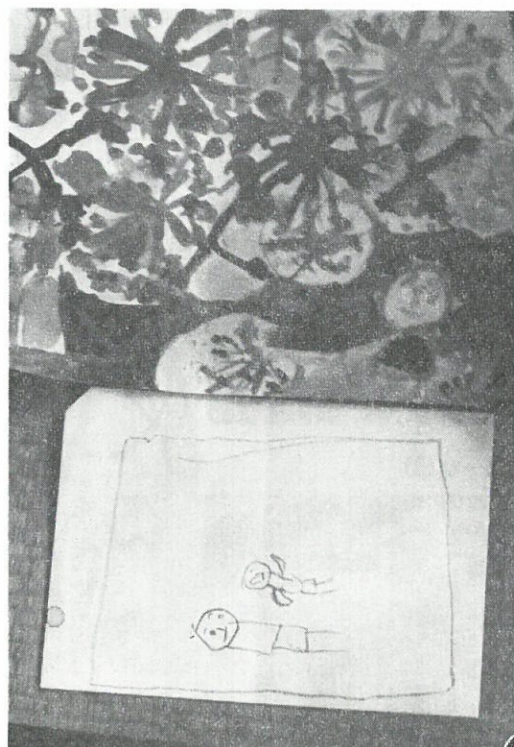


図 8

治癒過程

